

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

## レプタ二枚

——マルコ伝第12章35～44節——

小池辰雄

1965年5月1日

水を割らない 新島襄と二ドル 行動的全身的 神有 キリストの中に飛び込む 無私の神的な姿

## 【マルコ12・35～44】

<sup>35</sup>イエス宮にて教うるとき、答えて言い給う『なにゆえ学者らはキリストをダビデの子と言うか。<sup>36</sup>ダビデ聖靈に感じて自らいえり「主わが主に言い給う、我なんじの敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」と。<sup>37</sup>ダビデ自ら彼を主と言う、されば争<sup>いか</sup>でその子ならんや』

大なる群衆は喜びてイエスに聴きたり。<sup>38</sup>イエスその教のうちにいたもう『学者らに心せよ、彼らは長き衣を著<sup>き</sup>て歩むこと、市場にての敬礼、<sup>39</sup>会堂の上座、<sup>40</sup>饗宴の上席を好み、<sup>41</sup>また寡婦<sup>やもめ</sup>らの家を呑み、<sup>42</sup>外見<sup>みえ</sup>をつくりて長き祈りをなす。その受くる審判<sup>さばき</sup>は更に厳しからん』

<sup>41</sup>イエス賽錢函<sup>さいせんばこ</sup>に對いて坐し、群衆の錢<sup>ぜに</sup>を賽錢函に投げ入るるを見給う。富める多くの者は、多く投げ入れしが、<sup>42</sup>一人の貧しき寡婦<sup>やもめ</sup>たりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘<sup>りん</sup>ほどなり。<sup>43</sup>イエス弟子たちを呼び寄せて言い給う『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れり。<sup>44</sup>凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有<sup>もちもの</sup>、即ち己<sup>しろ</sup>が生命の料をことごとく投げ入れたればなり』

## ●水を割らない

<sup>35</sup>イエス宮にて教うるとき、答えて言い給う『なにゆえ学者らはキリストをダビデの子と言うか。<sup>36</sup>ダビデ聖靈に感じて自らいえり「主わが主に言い給う、ヤーヴエーがアドナイに』とという言い方です。

我なんじの敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ』と。<sup>37</sup>ダビデ自ら彼を主と言う、

即ち、「アドナイ」と言つた。



されば争<sup>いか</sup>でその子ならんや』  
マタイ伝の一一番先を見ると、

「アブラハムの子、ダビデの子」

と書いてある。けれども、ここでは、イエスは自分を

「ダビデの子」

とはおつしやらない。ダビデは自分のことを「主」と言つてはつきりとそういうように

「私の右に坐せよ」

と。復活・昇天のキリストのことを既にイエスは預言をもつてはつきりとそういうように言つてらつしやるわけです。アブラハムの裔<sup>すえ</sup>でありながら、しかし、イエスは

「アブラハムの先にありし者」

である。いくらアブラハムの信仰が立派であるといつても、キリストの信はまたそれとは次元がちがう。ダビデがいくら地上の王として理想に近いような王者であつても、キリストが王者であるということは、「メシヤ」であるということは、全然その意味がちがう。こ

ういう非常に確然たる自覚をもつてキリストはこの時に宣言しておられる。

大なる群衆<sup>おおい</sup>は喜びてイエスに聴きたり。<sup>38</sup>イエスその教のうちにいたもう『学者<sup>ら</sup>に心せよ、彼らは長き衣を著<sup>き</sup>て歩むこと、市場にての敬礼、<sup>39</sup>会堂の上座、饗宴<sup>ふるまい</sup>の上席を好み、<sup>40</sup>また寡婦<sup>やもめ</sup>らの家を呑<sup>のみ</sup>み、外見をつくりて長き祈りをなす。その受くる審判<sup>さばき</sup>は更に厳しからん』

キリストは嫌いなものとして、こういつた傲然たる傲慢<sup>きよまん</sup>き偽善<sup>ぎぜん</sup>さ、これにまさるものはなかつたので、マタイ伝23章でも、

「偽善なる学者・パリサイ人よ」<sup>びと</sup>

と言つて、もの凄く、こんな激しいことをイエスがおつしやるかと思うくらいに、激しいことを言われた。神の御靈の真理に即しては、キリストは何ものも恐れず、また何のはばかりことなしに、はつきりとものを言われたわけです。

どの言葉にもキリストの言葉には水が割られていない。それをどう解釈しようが、本当に受けとるものは受けとれというのが、キリストの福音の性格です。それですから、いわゆるこの世のいろんな常識的な判断や、この世の理性や、この世の感情には躊躇<sup>ちよ</sup>となることがいくらもある。福音書はその意味において非常な躊躇<sup>ちよ</sup>の書であります。

それを適当に水を割つて、解釈しているのが普通のキリスト教界の現状である。私たちは聖書を端的に——その「言葉通り」ということは何も言葉に執するという意味ではなくて——その御言の本当の気合に、その根源の内実に——単なる「意味」ではない——その内容がどういう現実であるか、それをキヤツチしないと、福音はいつまでたつてもその人の本当の実にならないし、本当の力にならない。どうか、皆さんは、都会はとかくそうですが、いわゆる「聖書の研究」というようなことに妙な魅力をお感じにならないように。研究したつ



ていいですよ。けれども、それではこの預言者・使徒たち、ましてやキリストの世界には入れないということを、私ははつきり言います。

ここからちよいちよい去つていく青年諸君があるのは、みなやはりそういういつた文化的な角度からの判断で福音書に躊躇する。私の話に躊躇するわけです。躊躇人は仕方がない。お釈迦さんもそう言つてます、

「どうにもならん」

と。いくら説明したつて、どうにもならん。どうか、皆さんが、聖書というものにまず信頼してからなくてはいかん。そして、この地上のいかなる科学も芸術も文学も哲学も与えることのできないものを、この聖書が与えているんだということに本当に気がつかなくてはいかん。

だから、

「学者らに心せよ」

と。この「学者ら」は特に律法学者です。彼らの思い昂り、

「自分たちこそ専門家である。自分たちこそ旧約聖書に詳しい」

と。律法に詳しい。また、宗教的におおいにいろいろなことを知つてゐる。祈りも整つた祈りをする。見掛け上よさそうだけれども、それはキリストの目で見ると、みんなメッキです。私たちはそのメッキ的なことではないよう。コリント前書2章にあるように、パウロは

「十字架の他は何事をも語らず」

と言ひながら、パウロがそこで畳みかけて言つてゐることは御靈のことなんです。そういうことが、今までの無教会は読めていない。こないだ、その前のところの大変な愛のことを語つたときに、私ははつきりとその十字架と聖靈の関係を言つておきました。

### ●新島襄と二ドル

<sup>41</sup>イエス賽錢函に對いて坐し、群衆の錢を賽錢函に投げ入るるを見給う。

これは過越の祝いのときですから、非常な群衆が四方八方から集まつてゐる。ユダヤの三大節の一つです。イエスも宮に行つておられた。この「賽錢函」は段階があつて——多分、十三だつたと思いましたが——どれくらいの額は上の方に入れるということらしい。金持ちはその上方に入れるわけでしょう。群衆のいろんなのが来て、お賽錢を入れる。これは今でも、日本でも——明治神宮や成田山とか、あるいは大阪の方にもあるようですが——元日とか、大晦日とか、いろんなお祭の時に非常に群衆がやつてきて、御利益にあづかりたいというわけで、お賽錢をあげるわけです。イエスはそれを見ておられた。

富める多くの者は、多く投げ入れしが、<sup>42</sup>一人の貧しき寡婦やもめたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。



昔の五厘です。ドイツの今の貨幣だと34ペニッヒと書いてありましたが、こちらでいうと今のが五円玉二つくらいでしょうか。これはとにかくユダヤのお金で最低のお金です。「レプトス」という字は「薄くて小さい」という字です。

<sup>43</sup>イエス弟子たちを呼び寄せて言い給う

弟子たちもそこにいたわけですね。

『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽銭函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れたり。

こういうことが見える人はやはりキリストの他にいないわけです。

<sup>44</sup>凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料をことごとく投げ入れたればなり』

これは譬話でなくて事実です。

これを読んでちょっと思い出すのは、新島襄先生がアメリカに行かれて、そしていよいよ帰るときに演説をされた。

「将来の日本の教育にはどうしても宗教教育が大事だということを、アメリカの学校を見て痛烈に思う。そこで、自分は日本に帰つて宗教を土台とした大学を建てるたいと志を立てた」

と、そういう演説を別れの時にした。聞いている人が非常に感動した。そういう時にすぐ——そういうところがやはりキリスト教国ですね——寄付金を募るわけです、寄付しろなんて言わなくても。寄付を募りまして、新島襄先生に贈つたわけです。その時に、あるお爺さんが二ドルを——ちょうどどこのレプタ一枚のように——出した。けれども、その人はこの二ドルのお金がないと帰れない。汽車にのれない。汽車賃が二ドルほどかかるわけです。自分は歩いて帰る。それを全部出してしまつた。

このことに非常に感激されたことが書いてありました。また、歩いているうちに、今度は後ろから追いかけてくるお婆さんがある。この人もやはり二ドルでしたが。彼らはやはり、こういう「レプタ」のお話をもちろん聞いている方でしょうが、このお婆さんも本当に、このお話を文字通り地でいつたわけで、自分の持ち金を、そこに持つていたお金を全部出した。

「自分はもう本当にあなたのその志がうれしいから、全部使つてももらいたい」と。私は、

「日本のプロテスタンティズムと突破の神学基礎論」

という私のドイツ語の論説の中にそれを引用しておきましたが。向こうでもそのお話をしました。

寡婦が

「己が生命の糧をことごとく投げ入れた」



という。「生命の糧」という言葉が「ビオス」という「生命」という字なんです。生命をことごとく投げ入れたという。「生命の料」という訳ですけれども、原語ではただ「生命」という字です。生命の料を、生命をそこに投げだした。

二枚あれば大体は、すぐそこに理性が働けば、まあ一枚に、半分にしておこうと考える。

「半分なければ、自分もちょっと今日困るから」

と。まず、100人のうち99人はそういうことでしょう。ところが、その寡婦は——多分これはその日暮らしをして、雇われてその日のものを儲けては、貯金もできないような方なんでしょう——一枚持つていて、どつちか一枚をとることでない。一枚持つていたのを、一枚全部出すということはまだ、ある意味においては、なしうるけれども、二枚あつて、そのうち一枚残して、一枚を出すというようなやり方が、まず大体の人間の知恵の働きです。ところが、この時に、もはやそういうことではない。これから先がどうなるのこうなるの、ということではなくて、その時に全身をそこに、一つの心をそこに投げ出す。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」

という。要するに、このキリストの言葉をこの寡婦は文字通り行つた。これが

「神を愛する」

ということ。単に心情的に愛しているのではなくて、具体的です。福音の世界は行動的、具体的である。

### ●行動的全身的

その点で——私は二言目には「無教会」なんてことを言つてすみませんけれども、無教会に育つたものだからね——とかく無教会の信仰は、そういつた

「信仰のみの信仰」

とか、

「信仰によつて義とされる」

とか言つているものだから、この行動的、存在的、全身的という角度からは、知らない間にズレをきたしている。観念の世界でいかにも立派なんだけれども、それはダメです。

こないだ、幼年学校の頃の古い友だちにでつくわした。その友だちは、帰りに新宿の神社の中を通つていくと、乞食が幾人かいて、

「自分はその乞食にとにかく持つているものをちよいちよいやつたら、非常にその乞食と親しくなつた」と言う。また、広島の原爆のときにも、

「こうすれば有利であるということよりも、こうした方が正しいということをやつたために、原爆にぶつかつて死ぬべき生命が助かっている」



と言う。その人の述懐を私は聞いて、

「それは君、偶然でも何でもない。あなたのその実存ゆえに、それは見えざる方がちゃんと守つてくださつたんだ」

と言つた。いわゆるキリスト教でも何でもないけれども、神さまは人間というものを本当に見ている。聖書を勉強しているから天国にいくのでも何でもない。

我々は、我々自身が即ち使徒行伝の先を自ら実行していかつたならばダメです。私はそういうことを思うたびに、もうこの講壇でしゃべるのが本当に嫌になる。

「私はいつでも、集会なんかやめてしまおうか」

と、そういう意味でも思います。それは、しゃべることは非常に一つの矛盾ですので。しかし、私は自分で弁明はしたくないけれども、

「この信行一如の角度を、躊躇ても転んでも滑つても、とにかくやつて行きますので、私は助けられて福音のためには死に到るまで」

と、そう思つております。そのことのためには、一歩も退きません。

### ●神有

この寡婦が、常識を乗り越えて、本当に神に全身を投げだした。ということは、今度は形にとらわれない。それでは、

「持つているものをみんな」

と言つて、何かそいつたことが一つの律法になつたら、それは今度は、またその行為自身が偽善になる。

要するに、何をしておりましても、また、たとえ皆さんが献金をなさるような時でありますても、それはもちろん何分の一かでよろしい。しかし、何をするにしても、そこに惜しみや常識がなくて、本当に自分はそこにすべての気持をかけて、

「今これだけのものがあるけれども、それはあれどもなきと同じである。私はすべてのことを、自分の私有も全部神有<sup>しんゆう</sup>として自覚しているぞ」

と。そして、一番の神有は即ち、この身このまま、この身それ自体が神有である。神の有<sup>もの</sup>である。我々の身体そのものが即ち神のものだから、我々の生活そのものが正に献身である。何をしていても、献身である。

よく教会で特に「献身」ということで、式をすることがありますけれども。皆さんは、どういうことをしていらっしゃつてもいいですよ。どんな事業をしたつて、どの会社に勤めたつてよろしい。けれども、それ自体が——学校にいようがどこにいようが——それ自体が献身である。そして、いざという時には、この「レプタ二枚」の「とき行動がとれる信仰をもつて、対していなくてはいかん。

相対的な世界に絶して、いつも絶対次元の神の国に自分を投入するときに、神さまは必



ず力を与える。必ず本当の知恵をくださる。どうか、そういう意味において、私たちはパーセンテイジを考えているような生き方をしないように。いつも、100%的なものである。質は絶対に100%である。集会に臨むときも、100%の心です。

そうするならば、この寡婦のごとく、あるゆる持ち物を、その生活費全部を、生活そのもの、生命そのものを与えていく。生命そのものを投げ出している人は、完全に神有となつてゐるんですから、神さまに投げ出している。神の中に投げるんですから。他に、横つちょに投げるのではない。キリストの中に投げるんですから。キリストの中に投げ入れたならば、これはもう、力と生命が来るに決まつてゐる。我々は自分を省みて、どうのこうのと处置しようとしたつて、どうにもならん。

### ●キリストの中に飛び込む

いつかも引用したとおり、法然が困つてしまつた。

「煩惱は身に添える影で、去らしめんとすれども去らず。

我々はみんな、いろいろな煩惱をもつてゐる。煩惱は身に添える影で、去らしめんとすれども去らず。

菩提は

澄んだ心の世界は、

水に浮かべる月で、取らんとすれども取ることを得ず。」

という。これが法然がぶつかつた壁です。菩提の境地に行こうとしても、どうにも、水の中の月影のごとく取るわけにいかん。菩提に達することができない。煩惱の黒い影を取ろうとしても、どうにもならん。そこで最後は、

「南無阿弥陀仏」

になつてしまつた。

けれども、福音の世界では、その煩惱も心配いらん。大事なことは、煩惱を去らんとすることではなくて、我がうちに影を消すところの光を受けとることである。光を、キリストという光体を受けとるために、また光体の中に身を投ずることである。どちらでも同じことです。

「われキリストの中に。キリストわが中に。」

という。「中に」という字が静的な、静かな「中に」という意味と、「中へと」という動的な意味と両方あります。

「われキリストの中に飛び込む。キリストわが中へ飛び込み給う」と。もちろん、御靈ですよ。そして、そういつた状態になる。動から状態の世界に入る。

これが祈りなんです。心を整えることはない。あるがままの、行き詰まりのままの、分裂のままの、そのまでいいから絶しろと。本当は行き詰まつて絶してゐるんだから。壁



にぶつかっているんだ。その壁の突破は、それはキリストの力がする。十字架が開いている。そして、この突破はできる。十字架が開いていてくださるから、できるわけです。

そして、私たちの中にキリストの光体、御靈の光が、御靈の力が来るから、その時に本当にこの行動が——そのような投げ込みが信であると同時にそれはもの凄い行であつて——そこにいわゆる行も当然発生してくるわけです。それをただ、信行、一如ということを観念したつて、どうにもならん。これはどこまでも観念ではない。

### ●無私の神的な姿

私たちの日常の生き方が、身銭をすつかり投げ出して、一枚とも投げだしているところの生き方であるということが大事です。

私は今度、大学へ——内村鑑三の息がかかつていてるというわけで、天野貞祐先生がD大学へ私を招いたから——行きますけれども、それで私が大学教授とか何とかいって、いい気になつていたら、それは私はダメですよ。私はいつでも、大学にありながら大学にない。そこで学生にぶつかつて、火花を散らしてやる。それで悪ければ辞める。どこにいましても、私の在り方というものは献身でなければダメです。

そこでいたくお金は、「曠愛新書」にできるだけ注ぎ込みたいと思っている。何でも神さまのために善用したいと、私はごまかしなく思っています。もし、そうでなかつたら、私は祝福されない。今度、家が建つたつて、そうですよ。これはやはり、福音のために、神さまのために使わなかつたら、私は祝福を受けない。

そういうわけで、皆さん、どのようなものを持つていようが何であろうが、何をしていようが、どうか、それを全部神有として自覚してやつてください。そうしたら、本当の力と喜びと展開が始まる。

私はこの寡婦の姿を見て、その中にある無私の神的な姿に、その中にあるキリストの光に、<sup>かが</sup>屈まなければならぬ始末です。また、自分がそういう世界に入ると、月影を宿す自由な姿ですから、水の如く自由です。そして本当に澄明であるから、菩提が、月影が、神のキリストの姿が私たちの中に宿る。

月影が宿るとは、キリストの姿が宿るということ。ここが福音の素晴らしいところです。单なる「南無阿弥陀仏」ではない。ここが福音の内容の素晴らしいところで、主イエス・キリストの御靈を受けとる。それはもう神さまがなさるなら、皆さんは、そこでどのような賜物が展開していくことか。聖靈において生きるのでなかつたなら、私たちに本当の豊かさと力と、楽な、またお互いに一切を乗り越えて愛して、お互いの中にキリストの火を燃やすようなものが湧いてこない。もうはつきりしてます。どうか、皆さんは、決してくすぶつたクリスチヤンであつてはならない。

花は陽の光を受けて咲いているが、しかし、私たちの身体から発するところの光を受け



て、万象が太陽の光よりも素晴らしい生命を生命していく。相手の人の心の中に本当の花を咲かせる。こうすることになつて参ります。これは恩寵の力ですから。ありがたくてしうがない。そういう質においては、

「これでいい」

なんていうところは一つもないですから。どしどし、大胆率直に勇敢に進んでいただきたい。レプタ一枚の寡婦の姿において、キリストが

「これだ」

と言つてご覧になつた。イエスが見られるものは、みなその通りです。ザアカイの「とき」、桑の樹によじのぼる姿もそうですけれども。この福音の世界は、全存在をもつて体当たりする世界です。とやかくと考えたり、辯證をあわせているような、そんな世界ではない。

始めのうちは、人は躊躇かも知れませんよ。けれども、

「やっぱり、それは本ものである」

と感ずる。これはもうはつきりしている。この驚くべきキリストという躊躇の石が、実は全世界にかくも大きく広がつていく福音である、力である。幸いなるこの福音の力である。もし、キリストが水を割つて、少しみんなに分かるようことを言つておられたら、これだけの力はない。

「根源の世界は絶対に、そういうつたごまかしのきかない世界であるということを、はつきりと受けとつて行かれるように」と言わざるを得ないわけです。

